子ども杉コレ・遊グッド賞作品

木の打楽器

今井 楠海・宮崎県（延岡市立旭小学校6年）

杉コレクションの最終選考に残る事が分かって「やったー！」という思いと、みんなの前で発表するのは　ちょっと緊張するなーと思いました。

学校の先生がクラスでの発表の場を設けてくれて練習したり、出来上がった作品で演奏の練習もしました。

いよいよ当日、子供部門の作品と大人部門の作品が並んでいるのを見て、他の人の作品もすごいなーと思いました。

「ボーッ」としている私を見てお母さんが「緊張してるの？」と聞いてきました。だから私は「ううん、バスケの試合よりかは緊張してないよ」と答えました。お母さんは「なんで？人がたくさんいるじゃん」と言ってきました、「だってバスケでミスをしたらみんなに悪いけど、この発表は私だけの責任だから」と答えました。

今日よりもっともっと緊張するバスケの事を考えたら、練習どおりの発表が出来ました。

でも、司会者の人からの質問はいきなりだったので、ちょっとドキドキしました。

小学校最後の年に、すごく貴重な経験が出来て良かったと思います。

ありがとうございました。

子ども杉コレ・遊グッド賞作品

ユラユラゆれるのんちゃん

次 嘉香 波・岩手県（野田村立野田小学校5年）

私は、杉コレクションの会場に行き、1本の杉でできたユラユラゆれるのんちゃんを見て、思った以上に大きかったし、乗ってみたら、ゆらゆらゆれるからすごくうれしかったです。私がゆらゆらゆれるのんちゃんの絵を書いた時は、ぼうしをかぶっていなかったけど、杉でできたユラユラゆれるのんちゃんは、ぼうしがついていたのですごくうれしかったし、かわいかったです。

私が、ユラユラゆれるのんちゃんの説明をする時、すごくきんちょうしました。でも、大きな声で読めたし、また、杉コレクションで選ばれたらいいなあと思いました。

本当にありがとうございました。

宮崎と岩手県、遥かな距離をつないだ人の絆

日當 和孝
岩手県木材青壮年協議会　名誉顧問

宮崎県から岩手県まで移動しようとすると、どんなにうまく乗り継いでもほぼ一日かかってしまう。旅行や仕事でも滅多に交流できる距離ではない。これほど離れた町の人が年に一度交流出来る機会を作ったのは「杉コレ」である。

あれほどの被害をもたらした東日本大震災がその後に果たしたものは、遥かな距離を超えて交流する人々の絆である。宮崎に限らず多くの人々が何らかの繋がりで遠い見知らぬ場所で懸命に復興に努力する人々を支えている。

２０１３年の夏には、宮崎から野田村のお祭りにお招きいただき、参加することができた。宮崎県の物産や杉を持ち込んで木工教室を開催。現地の人々とも交流ができた。

「杉コレクション」がめざした、杉のもつ可能性を広げるという目標は、全く想像しなかった方向にも広がりはじめている。

延岡市で開催された杉コレ２０１３は２回目の杉コレ参加となった。前回は、確か都城市の杉コレに日本木青連として審査員での参加と記憶している。その時も地域の木青連活動のスケールを上回るイベントとして感嘆したが、今回の杉コレ２０１３は前回の感動を更に上回るものとなった。

商店街を貸し切り、朝から夕方まで杉コレづくしであり、杉文化・杉芸術の創生を感じさせるものであった。更に、杉コレ２０１１の「抱つこの椅子」から続く杉コレと岩手県野田村との交流は関係者の熱意により継続され、今年は野田村の夏祭りにおいて杉コレ２０１２受賞作品の「屋台」をくりだし、宮崎県のＰＲや木育事業を展開し、延岡では野田村特産品を市民の皆様への紹介等、遠距離恋愛が実を結ぶものとなった。

杉コレが果たしてきた杉を題材にした「木の文化・芸術」の創造が結果として、遠く岩手・野田村の震災復興の大きな励みとなっていることに感謝申し上げます。

明内 和重
野田村役場　総務課
企画調整班　総括主査

交流の始まりは「だっこのいす」からでした。２０１１年の杉コレクション（子ども部門）でグランプリを受賞した作品を被災地へ…ということから野田村へ贈られて以来、宮崎との交流が始まりました。デザインの考案者は当時小学３年生の女の子でありましたが、このデザインにかかる被災地への熱い（想い）は、作品の作り手を始め、市民の心までを動かし「だっこのいすを東北に送るプロジェクト」の発足にまで至りました。後に、その活動実績が評価され「Ｇマーク」の受賞にも繋がったことは関係者一同の喜びでした。

今回、杉コレクションに参加して、「だっこのいす」の考案者と出会う機会に恵まれたことで、２年ぶりの再会でありましたが、彼女の成長から時の経過（被災地の時間との差）を実感したほか、「杉コレ」をステージにして、いろんな交わりがある中で、宮崎の太い杉のような脈々と続く時の長さと力強さを感じさせられました。

そして、何より嬉しかったのは「明内さんはメル友です！」と言われたことでした。全ては「震災」がきっかけです…

小野寺 修一
野田村役場　総務課　庶務財政班　主査

東日本大震災の後、色々な場面で「絆」という言葉が使われています。野田村でも全国・世界各地から様々な形で支援をいただき、絆を実感しています。その中でも「だっこいす」が結んだ宮崎県の皆様との友情の輪は、私たちの心にも形にも残るもので、感謝の気持ちで一杯です。特にも、今年はお祭りに出店・交流という形で、木青会の皆様から野田村に来ていただきました。お忙しい中、本当にありがとうございました。

杉コレクションには昨年の宮崎市開催から参加させていただいておりますが、野田の子どもたちは貴重な体験をさせていただき、非常に喜んでおります。震災津波を経験した野田村ですが、総面積の85％は森林です。

この交流をきっかけに、野田の将来を担う子どもたちが木に触れ、ものづくりを考えるきっかけになればと思っています。そして、野田の林業を支える後継者が増えることを願い、私たち大人も森や木に触れる場面をつくっていきたいです。